

歯周病原細菌に対する血清抗体価の応用プロジェクト

日本歯周病学会 平成 21～22 年度 学会主導型研究

代表者 高柴正悟 理事

(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯周病態学分野)

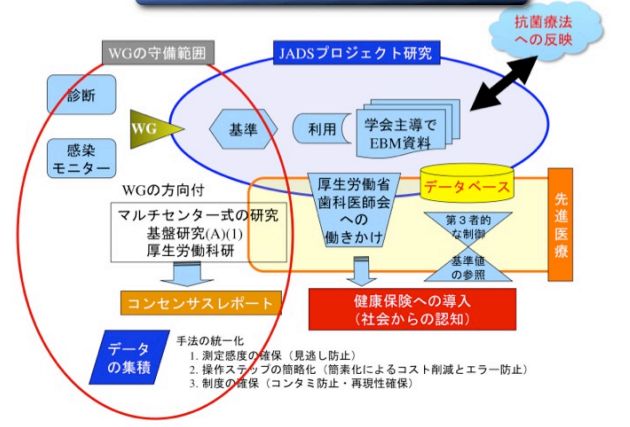
1980 年代から歯周病原細菌の感染に対する血清中の免疫グロブリン G (IgG) は、歯周病の病状を生体-寄生体相互作用の観点から把握することに使用されてきました。その当時から研究から、残念ながら、歯周病原細菌に対する生体反応は、歯周組織の破壊度を調べる歯周組織検査結果(歯周ポケット深さ、歯肉出血度、歯の動揺度、歯槽骨の吸収度)と完全には一致しないことがわかっています。しかし、歯周組織での細菌感染度を把握することができるので、歯周治療による細菌感染の除去効果を判定する際や歯周内科的なアプローチの際の歯周病原細菌の感染度を考慮する際などには、有用な検査として利用できます。

日本歯周病学会としては、図 1 に示すように平成 13 年度から歯周病原細菌に対する血清抗体価の応用プロジェクトに取り組んできました。ここ 10 年間に渡る取組期間において、最近の 2 年間は学会主導型研究として、まとめに取り組みました。さらに、厚生労働科学研究費補助金による高齢者の誤嚥性肺炎に関する研究にも応用してきましたし、開業歯科医と開業内科医が共同して取り組む動脈硬化症と歯周病の関係に関する研究にも応用されてきました。

図 1 日本歯周病学会における血清抗体価標準化に向けた学会主導型研究の現在までの経緯

1. 平成 13～14年度 (石川 烈 理事長)
 - ・ 研究委員会の中に「血清抗体価ワーキング」の設立
2. 平成 15～16年度 (鴨井久一 理事長)
 - ・ 上記ワーキングの継続
3. 平成 17～18年度 (野口俊英 理事長)
 - ・ 第 48 回春季学術大会 (長崎: H17.4) にて ワークショップ開催
「歯周病の細菌検査: 血清抗体価測定標準化と測定キットの構築」
 - ・ 平成 18～20 年度・科学研究費基盤研究 A が採択される
(研究代表者: 高柴正悟, 分担者: 永田俊彦ら 11 名 / 多施設共同研究)
4. 平成 19～22 年度 (山田了 理事長, 伊藤公一 理事長)
 - ・ 科学研究費基盤研究 A の遂行
 - ・ まとめ (平成 21～22 年度: 学会主導型研究)

図 2 日本歯周病学会の計画全体像



一方で、図 2 に示すように、易感染性状態になるがん治療や臓器移植を受ける患者に対して、歯周病原細菌の感染度を調べて、周術期の歯科処置を行うという、先進医療(検査)としての申請も準備されています。ここでは、平成 18～20 年度の日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究 A によって構築したデータベースシステムを改良した「Web 口腔内科データ管理システム」を応用して、研究を進めています。このデータベースは、種々の微調整を行うことで、他の研究(他の学会主導型研究も含む)へも利用されています。

研究成果に関するものは、査読制度のある雑誌には未だ掲載されてはいません。しかし、論文投稿を繰り返しながら、研究成果の充実を図っているところです。日本歯周病学会内だけではなく、歯科界に拡大し、さらには医科歯科連携での研究成果が今後にはできます。さらに、日常の医療の中へいかに取り込んでいくは、医療技術提案学会の一つである日本歯周病学会の使命でもあると思います。

関連 HP : http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~perio/stakashi_web/kiban_a_site/index.html